【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	岩手県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	宮古市立河南中学校					
学　年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	3	3	3	0	9	１８
生徒数	９６	８８	９９	0	２８３	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

基礎・基本の確実な定着を図るための教科指導の在り方
―　定着を図るための指導を取り入れた授業改善はどうあればよいか　―

２．研究内容と方法

（１）実施学年・教科

・　第２・３学年数学
生徒の理解度に差が出やすい教科、学年であるため
・　全学年、全教科
全校体制で取り組むためには、すべての教科・学年で取り組むほうが効果的であると考えたため
・　全学級、学級経営全般
学力向上を図るためには、教科だけでなく側面からの支援も大切であると考えたため

（２）年次ごとの計画

平成14年度	○　テーマ 基礎・基本の定着を図る学習指導の在り方 ○　仮説 数学において、学級を習熟度別に分け、個に応じたきめ細やかな少人数指導を実施すれば、学習に対する興味・関心も高まり、学習の仕方も分かって、学力は向上するであろう。 選択教科の数学・英語において、基礎・基本の定着を図る指導を継続的に行えば、理解も進み、学力は向上するであろう。 ○　研究内容・方法 数学における習熟度別の少人数指導の在り方 教科の基礎・基本の定着を図る選択教科における補充的指導の在り方

平成15年度	○　テーマ 基礎・基本の確実な定着を図る学習指導の在り方 ○　仮説 各教科の基礎・基本を厳選し、繰り返し定着を図る指導を取り入れた授業改善を行えば、理解も進み、学力は向上するであろう。 数学において、単元毎に適した学習形態をとって授業を行うなら、学習に対する興味・関心も高まり、学習の仕方も分かって、学力は向上するであろう。 学級経営の面から、学習を支援するような取り組みを行えば、学習に対する興味・関心が高まり、学習意欲が向上するであろう。 ○　研究内容・方法 基礎・基本の定着を図るための指導を取り入れた授業改善の在り方 数学におけるＴＴ指導、少人数指導などの学習形態の設定の仕方 学習意欲を高めるための学級経営での支援の在り方 ＊　平成１６年度予定していた学校全体の支援を、研究推進する上で必要であると判断し、今年度から実施した。

平成16年度	○　テーマ 基礎・基本の確実な定着を図る学校全体の支援の在り方 ○　仮説 学校全体で、各教科の基礎・基本の定着を図る指導を取り入れた授業改善を行えば、学習意欲や理解も進み、学力は向上するであろう。 学区内の小・中学校や地域連携して教育を推進していけば、学力向上に対する意識が高まり、学力が向上するであろう。 ○　研究内容・方法 全教科での基礎・基本の定着を図る指導を取り入れた授業改善の在り方 小・中学校連携による学力向上を目指す支援の在り方

（３）研究推進体制

研究部 ― 原案作成 ― 校内研究会 ― 推進母体

学力向上フロンティア推進委員会

説明・検討（校長、教頭、教務主任、研究主任、生徒指導主事、地域代表者）

Ⅲ．平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

（１）確認テスト・単元テストの結果から

授業改善の手立てとして次のサイクルで授業を実施した。

確認テスト(前時の基礎・基本問題)→課題解決型の授業→確認テスト(本時の基礎・基本問題)→自己評価というサイクルで１単位時間の授業にする。

この積み重ねをした後、単元テスト（確認テストの抜粋）→目標まで到達していないときに再テストを行う。

この積み重ねをした後、定期テスト(単元テストで落ち込んでいるところからの抜粋)を行う。

４月　第３学年社会科公民分野

	確認	確認	確認	確認	確認	確認	確認	確認	単元	再単	期末
総　点	8	9	10	9	11	9	6	9	52	52	100
平均点	7.4	5.7	7.6	7.9	10.0	8.2	4.8	6.7	36.4	45.6	81.0
正答率	92.5	63.3	76.0	87.7	90.9	91.1	80.0	74.4	67.4	87.7	81.0

最初にこの形式で授業を行うことにしたときの数値では、確認テストは正答率に大きな幅が見られる。分析すると、授業の間隔が開くと正答率が悪くなり、短いと良くなるという傾向にあった。これは、確認テストを本時の最後と次時の最初と２回行っているが、最初はあまり意識せず復習などに取り組まなかったためであると考えられる。その結果、単元テストでも復習せずに、正答率を大きく下げ、再テストとなったと考える。１学期後半になると、このサイクルにもなれ、期末テストでは、成果を挙げた。

１０月　だ３学年社会科公民分野

	確認	確認	確認	確認	確認	確認	確認	確認	確認	確認	単元	期末
総　点	10	10	10	12	6	11	9	6	7	10	92	100
平均点	9.0	7.7	9.4	10.3	5.6	9.7	8.0	4.9	6.1	8.4	70.6	87.7
正答率	90.0	77.0	94.0	85.8	93.3	88.2	88.9	81.7	87.1	84.0	76.7	87.7

２学期に入ると、このサイクルでの学習も定着し、２回目の確認テストの前に復習する姿も見られるようになって来た。単元テストの前も、確認テストを使い復習するようになり、学習に対する意識にも向上が見られた。また、基礎・基本の習得にも向上が見られるようになっている。単元テストでは８０％以上の生徒が正答率８５％を超え、期末テストでは８０％以上の生徒が正答率９０％を超えるようになっている。

（２）教師用学習状況調査の結果から（一部抜粋）

項　　目	1	2	3	4	平均
確認テスト・小テストなどは、理解させるのに役立っている。	0	0	7	6	3.5
単元テストは理解をさせるのに役立っている。	1	0	6	4	3.2
選択モジュールは生徒の基礎学力向上に役立っている。	0	1	3	3	3.3
選択数学は生徒の基礎学力向上に役立っている。	0	1	7	2	3.1
選択英語は生徒の基礎学力向上に役立っている。	0	1	4	2	3.2

上記調査及び記述式の調査から以下のことが言える。

① 校内研究会で、全教科取り組むことにより、教師全体の意識が高まり、学力向上に対しての取組が全校体制で意識化された。

② 学力向上の取組で示された一連の流れで単元を組み立てていくと、生徒は意欲的に授業に取り組むだけでなく、家庭学習にも取り組むようになってきている。

③ 単元テスト・確認テスト・ドリル学習が日常化され、生徒の学習に対する意識も高まった。

（２）数学科の教科部会での検討から

① 少人数指導は、基礎・基本の定着に有効であった。

基礎・基本コースでは、基礎・基本を個別指導することによって、授業内容を理解するようになった。生徒が抱いている誤解や間違い、忘却を、個に応じて解決することができ、そのことが学習意欲と学力向上につながった。また、応用コースでは、基礎・基本を関連付ける仕方を指導することによって、数学的な考え方や見方が定着してきた。

② 多様な指導方法が可能になった。

授業内容や生徒の実態に応じて教材を指導する方法が広がり、適切な授業が行われた。授業内容には、概念形成、計算や性質、適用があり、その場面の授業展開に応じた指導方法の改善が行われた。また、生徒の実態に応じたドリル学習や少人数指導を取り入れることができた。

２．今後の課題

（１）基礎・基本の補充を図るための選択教科の準備が大変だった。効果的に指導するための工夫について検討を要する。

（２）すべての教科で検証計画が弱かった。目に見える取組にする必要がある。

（３）数学における少人数指導で、まだ十分に少人数指導のよさが活かされていないため、一人一人の実態に応じた指導の工夫をさらに研究、実践する必要がある。特に、授業改善の研究を教材開発の点で進める必要があり、それが基礎・基本の定着につながると考える。

Ⅳ．学力等把握のための学校の取組

教師用学習状況調査（本校作成による観点別及び記述式調査、年２回７月・１２月　全教員）
生徒用学習状況調査（本校作成による観点別及び記述式調査、年２回７月・１２月　全学年）

・ 教師、生徒が学習に対してどんな意識を持ちどのように取り組んでいるかを判断するための調査教研式知能検査（年１回４月　第１学年）、CRT 教研式学力検査 国・数・英(年１回 12 月　第１・２学年)、学習定着度状況調査５教科（年１回１０月　全学年）

・ 定期的に学力検査を実施することにより、実態を把握し、３学期に補充指導するための検査

Ⅴ．フロンティアスクールとしての成果の普及について

・ PTA 懇談会等での説明（４月、PTA 総会時、体育館、保護者対象）

・ 地区懇談会での説明（７月　各地区集会所等、保護者対象）

・ 学校通信（随時　保護者対象）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校
【学校規模】　□３学級以下　□４～６学級
☑７～９学級　□１０～１２学級
□１３～１５学級　□１６学級以上
【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導
☑その他
【研究教科】　☑国語　☑社会　☑数学　☑理科
☑外国語　☑音楽　☑美術　☑技術・家庭
☑保健体育　☑その他
【指導方法の工夫改善にかかわる加配の有無】　☑有　□無